
空白の話 ～レイシック～

牛を飼う男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の話 ～レイシック～

【Nコード】

N7942M

【作者名】

牛を飼う男

【あらすじ】

『夏のホラー2010 ～百鬼集帖～』参加作品。

佐伯供花は大学時代、泉浩太という彼氏と付き合っていた。しかし、彼の『異様な趣味』に嫌気がさし、未練がありながらも別れてしまう。

—それから3年後。視力を回復させるためにレーシック手術を受けた供花。目に異物を感じながらも視力は順調に回復していった。ただ—それから奇妙な『影』が見え始める…。

空白の話シリーズ第3話。見えてはいけないものが、現世に姿を現した…。

『―あなたは…霊…ですよね?―』

―千の物語があれば千の解釈が生まれる―

―この話を聞いたあなたはどんな解釈をするだろうか―

―例えその解釈が異生物であろうと―

―俺はただ物語を綴るだけだ―

『空白の話　くレイシツク』

《京都》

白髪の男が神社の前で手を合わせていた。彼の名前はドウジ。白髪だが老人ではない。立派な成人の若者である。

今は真冬の時期。修学旅行生も参拝客も少ない。その中でポツンと立っているドウジの姿は第三者からは異様に見えた。

神社の名前は『北野天満宮』。菅原道真が信仰の対象となっていて。学問の神とも言われた菅原を頼って多くの受験生が例年お参りにくるようだが、受験シーズンを過ぎたのか今は静寂に包まれてい

る。神主も見当たらない。有名な神社の割には今日は人が少なすぎた。

「菅原道真か…」

ドウジが呟いた。903年まで生きたこの神は、怨霊とも呼ばれている。流刑された時、都に天変地異を起こしたからだ。穏やかな学問の神とは違う、極端な一面を持ち合わせていた。

ふと、横を向くと女が1人いた。ドウジと一緒に参拝を終えたようだ。ドウジと視線が合うとニツコリと笑った。女の年は若いかもしれないだろう。

「こんにちわ」

澱みもなく挨拶してきた。ドウジも女に合わせて頭を下げる。単なる会釈だろうとドウジは思い、その場を離れようとした。

「ちょっと待ってください」

女に呼び止められてドウジは驚いた表情を見せた。何の繋がりもない赤の他人に話しかける若い女は珍しいからだ。この時代、もうほとんどいないと言っても過言ではないだろう。

「…何か？」

その若々しい声に今度は女の方が驚いていた。

「びつくりした…おじいさんかと思った」

「よく言われるよ」

愛想よくドウジは笑った。それで悪い人ではないと思われたのか女はドウジの傍にまで近寄ってきた。人懐っこい笑顔を見せる。

「今日は人少ない…というかいけないですね。珍しい」

「まあ時期が時期だからな。仕方ないさ」

「何かお勉強をされているんですか？」

そう聞かれるだろうとドウジは思った。手にノートを持っていてはそう見えても仕方がない。

「いや、ブラリ旅ついでに寄っただけさ」

「旅？ 旅をしてるんですか？」

「ああ」

「目的もなく」

「特にないね…まっ、しいて言えば…」

ドウジはポケットから煙草を取り出そうとした。すると、遠くで神主が睨んでいるような気がして止めた。

「物語を集めている。都市伝説、昔話、怪談話…ジャンルは問わない」

「へ」

女が感心している。その目は曇っていない。ドウジは少し照れた。「まっ、物書きのようなものやっていてね。ネタ集めさ」

「かつこいい！」

女は手を合わせてはしゃいだ。数少ないとはいえ、そういうことをたまに言われる。まあ世の中は広いなとドウジは思った。

「じゃ私の話…聞いてくれますか？」

突然だった。またドウジが動揺した。

「…ほう。何かあるのかね？」

「はい。面白いかどうかわからないけど顔つきが変わった。本気のようなだ。」

「そうかい。ならアッチで話を聞くよ」

「どうしてですか？」

「煙草がここでは吸えん」

「ははっ、面白い人。わかりました。行きましょう」

女の方が積極的だった。ドウジはどんな話を聞けるのか…興奮を顔にも出さずに女についていった。

まず大学時代の話をお願いしますね。

当時私には彼氏がいました。年齢は同年です。大学では医療系の学問を専攻していました。医療と言っても事務系ですね。

彼氏と出会ったのは大学に入学してからすぐです。講義の席がたまたま隣で教科書を見せてくれたことで好きになりました。えっ？ 惚れっぼい？ そうですかね？ まあ積極的だったのは私の方です。彼は奥手で本当に別れるまで何もありませんでしたから。

付き合いは普通でしたよ。普通に学食行つて、普通に勉強して、普通に一緒に帰る。高校の時も彼氏はいましたが別れてしまいました。ええっ？ 彼は何人目か？ …それは内緒。

春が終わつて夏に入つた頃ですかね。大学も夏休みに入つたんで、彼とどこか旅行に行くことにしたんですよ。ほらっ、大学の夏休みって長いでしょ？ あっ、わからない。2ヶ月ぐらいあつたんですよ。それで実家に帰るのも暇だし、彼と付き合い合つてあげようと思つたんです。彼のほうから誘つてくれたんですよ。珍しく。

旅行先も彼が決めてました。私はどこに連れて行ってくれるんだろうと期待してましたよ。もし危ない所だったらどうしようかなとも思つたけど、彼に限つてはないですね。だつて彼草食系ですもん。一応着替えは綺麗なの持つていきましたけど。

電車で彼と雑談しながら県外へ行きましたね。そこからバスに乗つて、またバスを乗り換えて、目的の場所に着きました。そこはどこか？ …それはちよつと言えないんですよ。理由はこれから話します。

そこは某有名な心霊スポットでした。ほら、よく夏のテレビの定番でよく放送されている場所ですよ。稲川…なんとかつて人も言つてましたけどそこは霊がでるらしいんです。それで彼はオカルトに興味があることがわかりました。そういえばUFOの話もしてましたね。まだ付き合いが浅かつたし、彼の深い所まではわからな

ったんです。

でもまだ気にならなかったですよ。好きという気持ちもあったし。どちらかというと私そういう人を好きになる傾向がありますしね。だからあなたの事も…あつ、冗談です。

そこではお地蔵さんがありましたね。誰が置いたかわかりませんが黄色い花も置かれていました。花はまだ新しかったように記憶しています。

きつと『峠でヒッチハイクする幽霊』ってやつですよ。車に客を乗せたらシートが濡れて、客が消えてるってやつ。シート誰が洗濯するんだって話ですよね。

そこで彼…何をしたと思います？

お地蔵さんにむかって石を投げつけたんです。

もうびっくりしましたよ。何をしてるんだって。彼は何度も何度もお地蔵さんに石をぶつけてるんです。私はてっきり心靈写真と一緒に撮るとか、もしくは供養するものだと思っていましたから。

「ちよつと！ 何してるの！」

さすがに感情的になりました。彼はびっくりして手を止めました。初めて見た私の感情に驚いたんだと思います。

「…実験だよ」

彼は静かにそう言いました。あつ！ 彼の名前教えてなかったです。泉浩太。私は佐伯供花。よろしく。

「実験？」

「そう。実験だー本当に霊がいるのかどうか」

ここまで聞くと彼は変な人だと思うでしょ？ 違うんです。本当に大人しくて大人っぽくて…知的で笑顔がカッコいい彼なんです。目も良かったんですよ。両目とも『2・0』って言ってましたから。当時の私は目が悪くてコンタクトしていました。

「霊がいるのかどうかって…」

「こつやって心霊スポットと言われる場所には理由がある。そこには人間の目には見えない巨大なエネルギーが渦巻いていると思うんだ。なぜそこにエネルギーが留まっているのか。それはまったくわからない。何かの条件があるに違いないと僕は考えた」

大真面目に彼は語っていました。

「その条件を見つけないためにこつやって配置や背景を変えているんだ。いつかそのエネルギーが決壊して暴流するようにね」

「そうなこと…してどうするの？」

「力さ。力を見るためだ。人はこの力を恐れて何もしていないでいる。それはもつたいないことだと思った。だから力を解放してやるんだ」

「つまり…『幽霊』を見たいと？」

「そうだね。そうともいう」

彼の目は輝いていました。なんだか変な理屈でしたけど私はちょっとカッコいいなと思いました。ほんとどうかしていました。

それから彼と付き合っていましたよ。もちろん『神仏壊し』も付き合っていました。私は見るだけで何もしていませんけど…嘘です、ごめんなさい。見張りを担当していました。その間にも彼の行動はどんどんエスカレートしていき、ついには貴重な仏様をも手にかけるようになっていったんです。

彼と別れようと思ったのは大学3年生の冬です。そろそろ就職活動する時期ですね。今は早いですよ。就職活動。

「ねえ、供花の彼氏。警察に捕まったわよ」

友達に言われて私は動揺しました。捕まった理由は明らかです。

予想通り『器物破損』でした。すぐに釈放されたみたいですけどね。私は一緒にいなかったです。就職活動で忙しかったし、いい加減あんな子供の悪戯みたいなことしたくなかったです。彼とも疎遠になっていました。

「別れたほうがいいんじゃない？ 就職に影響あると困るでしょ」
現実問題そうでした。でも1つ不安があったんです。

それは彼に『呪い』をかけられるんじゃないかってこと。

だってオカルト信じてるんですよ？ 笑わないでくださいよ！
当時は本気だったんです！

「私も一緒にいてあげようか？」と友達も言ってくれましたが、さすがにこれは私と彼の問題なので断りました。彼に会いに行くと顔は明るくてテカテカしていました。私はてっきり祟りでも受けたように青白くて俯いてると思っていたのですが…。

「いいよ」

彼は別れ話にあっさり乗ってくれました。確かに疎遠にはなっていました。が、こんなにあっさり別れられるとは思いませんでした。逆に私が彼を『呪い』そうでしたね。

「社会に出てもお互いががんばろう。また友達として会えるといいなじゃ、元気で」

彼はさっさと行ってしまいました。ブツブツ独り言、言ってましたけど。まるで私が失恋したみたいでした。別れ話は私から切り出したのに。その夜は友達の家でお酒を飲んで、大泣きですよ。まあおかげですっきりしましたけど。

私は病院派遣の会社に就職し、彼は行方不明です。友達でもわからないと言っていました。

—それから3年たちました。

病院に勤めてから色々ありましたけど3年もたつと慣れるものですね。給料はやっぱ安いですけどそれなりに働いていました。そんな頃同じ男性の事務員さんが『レーシック』っていう手術を受けたみたいなんですよ。

え？ 何それ？ うっそ。知らない人いたんだ。

レーシックっていうのは、『エキシマレーザー角膜屈折矯正手術』のことですよ。簡単に言うと近視の人の視力を治す手術なんです。まあ専門的なことはわかりませんけどね。

その事務員さん。目が悪くて視力測定不能って健康診断の時言われていました。それで一発奮起してレーシックを受けてみたそうなんです。すると『2.0』まで回復したって言うんです。本当ですよ。みんなで試しに視力測定してみたらズバリ当ててましたもん。その頃私も視力が落ちて悩んでたんです。眼鏡はカッコ悪いし、コンタクトしてたんですけどたまに外すの忘れちゃうし。視力測定も見事にまでの『測定不能』。それでその人の紹介というか、割引チケットみたいなもの貰って、病院に行っただけです。

割引チケットがあるのかって？ 病院によつてはありますよ。会員になって、割引チケットを友達なんかに渡す事によつて、何万円か還元されるってやつです。いい商売してますよね。

紹介された病院に行つて、まず支払い方法を決めました。現金一括ですよ。当然。

次に検査です。検査は無料です。視力検査やつて、暗い部屋で目を検査して、麻酔検査して……。およそ3時間ぐらいですかね。検査が終わった時はもうクタクタでしたよ。もちろん手術OKでした。たまに手術が駄目って人もいますけど。

次に手術コースです。私は一番安いやつにしました。高いコースだと役職ドクターって言ってますけど、ここだけの話、役職ドクターなんて腕が悪いですよ。それにどのコースやったって同じようなもんですよ。『松・竹・梅』理論ってやつで、どうせみんな『竹』ばっか選ぶでしょうけど。

目に何か入れるのは怖くないかって？ 怖いですよ。でもこういう病院は失敗が世間に広まるのが怖いですから大丈夫です。あなたもどうですか？ いい？ そうですか。目、悪くないんですね。

数日後、手術日です。

事前検査やつて、説明受けて、手術室まで看護師さんに案内されました。点眼麻酔してまずフラップつてのを作るみたいなんです。それが終わったらいいよレーザーを目の中に入れるんですね。フラップ作成後、目がよく見えなくなつて看護師さんに連れて行かれ

ました。

手術室に入ったら、何故か看護師さんが私の体を押さえるんですよ。「なんでだろう？」って思いました。医師が『光を見といてくださいね』と言うんで必死で見ましたよ。医師の隣で臨床工学士さんが『レーザー80%です！』って叫んでるんです。あのアニメの『波動砲か』って突っ込みたくなりましたね。

レーザーが目に入った後、鼻に焦げ臭い臭いが入ってきました。（あっ、それか）

それで看護師さんが私の体を押さえていた理由がわかりました。恐らくパニックになる患者さんがいたんだと思いますよ。事前に説明しとけばいいのになって思いました。たぶんそんなこと言うと思える人がいるから内緒なんだろうと思いますけど。

私？ 私は平気ですよ。病院で働いてますからね。偉いですか？
…ははっ、ありがとうございます。

手術が終わって、菌を殺す目薬をさして、終わりです。簡単ですよ？ でもその日一日はひどかったですよ。もう目が痛くて痛くて！ 死ぬかと思いましたよ！

もらった保護用眼鏡はダサいですし、途中で外しました。家に帰って痛み止めの目薬さしたりしてウンウン唸ってました。やめときゃよかったかと思いましたもんね。それぐらい痛かったです。でも次の日はすごかったですよ。痛みが引いていつもの癖でコンタクトしようとしたんです。すると目がよく見えるんですよ！

（あれ？ コンタクトまた忘れたのかな？）

って思っちゃうくらい。手術前にコンタクトはしてはいけないうで、奥にしまっただけのこと忘れてました。

外に出るともうすごかったですよ！ はっきりと世界が見えるんです！ 今までまったく見えなかったのに！

これならたまにテレビでする『マサイ族』の視力対決にも勝てる！ って思いましたよ。それぐらいすごかったです！

その日も仕事は休みでした。翌日検診つてのがあるんですよ。そ

の前に回復した視力を満喫していました。これでもう怪しい『ブルーベリー』も買わなくていいし、『眼鏡』も『コンタクト』も必要ありません。キャッホーって叫びそうでしたよ。でも少しだけ痛みが残ってたんです。

点眼薬をさして、検診に行きました。まず視力検査をしてもらうと予想通り『2.0』。小学生以来でしたね。こんな数値。

次に眼科の先生の診察です。顕微鏡のようなもので私の目を覗きこんでいました。

「うん？」

先生が首を傾げました。それでちよつと心配になって「どうしたんですか？」って尋ねたんです。

「…少し炎症が出てますね。まあ…それは誰でもありますから」

私のカルテに何かをササツと書くと、お薬をくれました。この薬を飲んで、あとこの点眼薬をさしてくださいって。気になったんで家に帰ってすぐ鏡で自分の目を覗きこみました。

(…?)

目の中に変なイボみたいなものが出来てたんです。ニキビみたいな。血管が破裂してたり、充血してるんならわかるんですがこれはちよつと知らないですね。

でもまあ大したことないだろうと次の日仕事に行きました。みんなに教えてあげると「行きたい行きたい」って盛況でしたよ。値段も昔と比べて安いですからね。…まあ安いといってもボーナス分は取られましたけど。

それから一週間後にまた検診です。担当は同じ先生でした。先生はいつものように顕微鏡みたいな器具で私の目を覗きこみました。

「…大きくなってる」

ボソツとそんな言葉が聞こえたんです。つい「えっ？」と言っちゃいました。

「あつ、いや。まあ誰にでもあるからね。またお薬出しますね。良くなってるから」

本当かなあって思いました。さつそく家に帰って鏡で見ると、イボみたいなものはなくなっていました。それならどうして先生は「大きくなってる」だなんて言ったのか逆に謎でしたよ。どこ見たんでしょうね？

まあいいかと私は気にもなくなりました。痛みもほとんどないし、視力はよくなってるし、問題はないと思っただんです。

―でも、それから奇妙なものが見えるようになったんです。

「？」

最初仕事中に見たそれは『白い影』でした。同じ若い男性の医療事務員さんにその影が見えました。

「？ どうしたの？」

「あつ、いやっ…」

「そうかい？」

その人は笑っていました。影はその事務員さんを抱きしめているように見えました。こう…人と人が抱きしめてる感じです。

「じゃ、カルテ看護師さんにもらってくるわ」

「はい」

事務室から出て行くと、中年の女性事務員さんが私に近寄ってきました。

「供花ちゃん。あの人はやめたほうがいいわよ」

「えっ？」

最初はどういう意味かわかりません。

「ほらっ、あの子顔がいいから看護師さんに結構人気あるでしょ」

「ああ」

そういうことかと思いました。でも私は彼に興味ありませんでした。元彼の顔がちよっとだけチラつきましたね。

「女性問題とか結構あるのよ。供花ちゃんのことだって狙ってるん

だから」

「ええっ？ そうなんですか？」

「供花ちゃん、真面目だから狙い難いのよ。だから……」

「ゴホン」と事務長が咳をしたので、中年の女性事務員さんはそそくさに自分の席に戻っていききました。

それから数日後、その男性の事務員さんについていた白い影が徐々に大きくなっていつていっているんです。あつ、大きくなっているというか、説明すると難しいんですけど形づくってるって感じで……人の形になっているんですよ。

「あの」

私が話しかけると白い影が私の方を向くんです。その影からはつきりと顔の形が見えました。『女の顔』が。

「どうしたの？」

「……………」

「佐伯さん？」

「あつ、はい。カルテを貸してほしくて……」

「いいよ。あつ、そうだ。今日一緒にご飯食べにいかない？ 明日

カルテの点検日じゃん。ちょっと相談したいことがあるんだ」

「……………」

白い影が私の顔をジッと見ていました。それは睨んでいるようにも見えました。

「？ 俺の横になんかいるの？」

「……いつ、いえ」

その事務員さんには見えていないみたいでした。

「あつ、そうか。今日は用事があるんだね？ ごめんごめん。また今度一緒に行こう」

「はい……」

おかげでうまくかわせましたけど。はっきり言って気味が悪かったです。

それから町中で白い影を結構見ましたよ。ほとんど中年の男や

女にくつついていました。たまに年寄りにもいましたけど。

あれは何て言うんでしょうね。『生霊』ってやつですかね。まさかレーシックしてこんな変なものが見えるとは思いませんでした。ええっ？ 今でも見えるかって？ 今は見えません。一ヶ月ぐらいたったら急に見えなくなりました。

―でも一ヶ月たつ前にとんでもないものが見えたんです。

その日は大学の同窓会でした。久しぶりに友達に会って話しましたよ。まだ若いのに結婚してる子もいてびっくりしました。晩婚化の時代なのにな。

バイキング形式の食事をしながら話していると、ふと前彼の事が気になりました。まあ人好きのする性格じゃないですからこんな所には来ないだろうとは思っていましたがね。キョロキョロしてる友達にニヤリと笑ったんです。

「元彼？」

ズバリ的中でした。未練たらたらですね。

「う…ん。やっぱりないよね」

私は肩をすくめました。

「いたよ」

「嘘っ!？」

本気でびっくりしました。だって本当にこんな同窓会なんて来そうにない人ですもん。

「どこに？」

「確かね…」

友達もキョロキョロと私と一緒に元彼を探してくれました。でも右隣にいた子…まあ友達ではなかったんですが私の事知ってたんでしょうね。手を振って私の耳の傍まで来ました。

「やめときなよ…」

「へっ？」

「あつ、私。あなたの彼の事知ってるんだけどね」

声は小さいですけど明らかに友達も耳をたててましたね。

「実は彼―呪われてるらしいのよ」

どういうことが最初はわかりませんでした。でも友達が同調して私に言ってきました。

「あつ、聞いたことある。ほら供花。彼って『変な趣味』があったじゃない。神仏壊したり、地蔵様捨てたり、国宝に落書きしたりさ」
国宝に落書きは言い過ぎだと思いますけど…彼ならやりかねないですね。テレビのニュースでそういうのを見ると彼がやったんじゃないかとヒヤヒヤしてました。地蔵様を捨てたのは本当かって？…
本当です…すみません。

「でしょでしょ。それで彼、付き合ってる彼女とかいたんだけど…」
声がさらに小さくなりました。

「みんな―死んでるんだよね」

「ええっ！？マジッ！？」

「マジマジ！佐伯さんと別れて、また別の彼女ができたみたいなんだけど。電車に落ちたって言うってた。それから崖から落ちたり、マンションのベランダから落ちたり、マンホールに落ちたっていうのも聞いた」

「マンホール！？それ本当に呪われてんじゃない」

何故か友達とその子が盛り上がったちゃって私は輪に入れませんでした。いや…余裕をなくしてたんですね。

「でも…あの人そんな人付き合いが得意なほうじゃ…」

「でもイケメンだったじゃん」

「まあ…それは…」

本当です。顔は良かったんです。でも草食系だったから…。

「だから会わないほうがいいって！」

「ほんとだよ。供花。彼が来ても私が護ってやるから」

2人にそんなこと言われてちよつと悲しくなっちゃいましたね。せつかく懐かしい再開を果たせると思ったのに。「トイレに行く」と言つて、その場から逃げちゃいましたよ。

会場から出て、トイレに向かう廊下を呆然と歩いている時です。

「！？」

いきなりツルツと足が滑ったんです。

「あつぶなあゝ…」

腰が抜けそうでした。廊下を眺めみると、何か透明な塊があるんです。清掃業者何やってんだって思いました。病院じゃ許されないですね。でも良く見てみると変なんです。

「……うん？」

何か粘っこい液体でした。何かの薬品か何かかと思いました。まさかレーシックのせいかとも思いましたが、実際触られるし霊ではないと思いました。

「何よゝ」

触るのも嫌で避けて通りました。でも、ふと廊下の下を見えてみると続いているんですよ。点々と…

透明な液体が…。

「えっ…何…」

一瞬背筋が凍りました。暗い廊下でしたからね。緊急灯しかついてなかったです。トイレ行くのやめようかと思いましたけど、好奇心が勝っちゃったんですね。透明な液体を追ってみました。

「…右？」

廊下の右にそれは続いていました。そこから先に行かなければよかったです。今では後悔しています。でも何かに誘われるように右の

廊下に入っちゃったんです。

「……あれ？」

廊下の先に誰かいました。後姿でしたけどはつきりと覚えています。元彼です。

黒のスーツを着て後ろ向きのまま立ってるんです。呆然と立ってるんじゃないですよ。誰かと話してるんです。

「……誰だろ……」

新しい彼女かもしれない。実はまだ元彼には未練があっただけです。だから今まで彼氏つくらなかつたんですよ。

何て話しかけようか考えているうちに透明な液体の事は忘れちゃいました。とにかく綺麗にしなきゃと髪を整えて、一歩前に出たんです。

「！？」

そこでようやく気づきましたよ。明りが暗くてよく見えなかつたんですけどね……ソレが……

「……あつ」

瞬きができませんでした。寒気が全身を包み始めて、呼吸が止まった気がしました。足がブルブルと震えてもきていました。

——彼の体に……巨大な蛇が巻きついていました——

アマゾンにいたような大蛇やあの映画の『アナコンダ』の蛇よりもでかいんです。彼の体をすっぽりと包んで巻きついてるんですよ。緑の鱗やヌメヌメした液体がテカテカ光っていました。ただそれだけじゃないんです。

——蛇の頭についてるんですよ。巨大な女の頭が——

何故女だとわかったかですって？　だってしつとり濡れた長い髪に死人のような紫の口。それにほっそりとした鼻が見えるんですもん。絶対女ですよ。不思議な事に目元はまったく見えませんでした。前髪に隠れてたっていうのもありますが、もしかしたら『なかった』のかもしれませんが。

（白い…影じゃない…何…アレ？）

レーシックのおかげで白い影はたくさん見ました。でもあんな生物見たの初めてでした。腰がガクガク揺れていました。映画で見るCGよりリアルで、気味の悪い生物でした。

「！？」

蛇女の顔がゆつくりとコチラに向きました。

顔が…笑っているように見えました。

同時に彼も私の方に振り向きました。

「…よう」

彼は明るく手を上げました。私は冷静を装うとしました。だってあの『蛇女』は私だけにしか見えていないはずです。彼には見えていないはずなんです。

「久しぶりだな」

「そっ、そうだね」

冷静に。

冷静に。

アレは霊なんだから。

「元氣してたか？」

彼が私に一步近づきました。彼が近づくとたびに『蛇女』も近づきます。彼に憑いてますからね。

「うっ、うん」

声の上擦りました。彼に近寄ってほしくないと思いました。彼だっけ自分の体に蛇が巻き付いていると知ったら嫌でしょうし、何よ

りも私が耐えられなかった。

「ああっ、そうだ」

彼が笑いました。

「――紹介するよ」

心の中で「えっ？」と思いました。「誰を？」って。

「可愛いだろ」

緊急灯がチカチカフリツカーしました。彼が蛇女の方を見て言ってるんです。

アレ？

クエスチョンマークが頭の中をグルグル回りました。そんなわけないと必死で自分に言い聞かせました。だってアレは――

アレは――霊――だよね？

「きゃ！」

後ろに下がってつい液体を踏んでしまったんでしょうね。廊下に尻餅ついてしまいました。彼は「馬鹿だな」と言いつつ私に近寄ってきます。

「俺は力を手に入れたんだ」

「はっはい？」

「これが力さ。ある日突然懐かれちゃってさ」

明らかに彼は蛇女の事を言っていました。蛇女がニヤニヤと笑います。勝ち誇ったように…。

（アナタ…霊じゃない…アレは霊じゃない…ナンナノーあの生き物は？）

「でもさー困ってるんだよね」

彼が細い目で私を見ます。

「コイツ…嫉妬深いんだ」

彼が私にまた一歩近づいてきます。

「女と付き合ってたびに…突き落としちゃうんだよ」

落とす？

落とす。

オトス。

まさかー

「なっ、なっ、何言ってるの？」

「…は？」

私は何も見えていない。そこには何もいない。だって私は普通の人だもの。

神も。

仏も。

地蔵様だつて壊していない。

「そこに何かいるの？ 私…何も見えてないんだけど…」

「ククッ…」

彼が小さく笑いました。

「嘘つけよ」

「…ひっ」

「ミエテルダロ？ ワタシが」

蛇がスルスルと彼から離れ―私に近づいてきました。

女はベンチに座ったままブルブルと震えている。ドウジはプーと煙草をふかした。参拝客は相変わらず来なかった。

「それで…お前さんはどうしたんだ？」

「当然！ そのまま走って、会場の外でも走って、タクシー拾って、電車に乗って、実家に帰りました！」

恐怖を思い出してしまったのだろう。女は興奮気味に叫んだ。遠くで神主が老眼鏡をズラして2人を見た。

「本当に怖かったんだから！」

「わかった。なるほど面白い」

「でしょ！」

コロコロ感情が変わる女だとドウジは思った。

「その後彼には会ったのか？」

「いえ…やっぱり怖くて…彼らしき人を見ても逃げてます。引越し

もしました」

「もう見えなくなっただんな？」

「もう見えません。白い影も、変な生き物も……。あれから半年はたつてますから」

女は「うゝん」と背伸びした。

「でもすつきりした！　こんな話誰にも話せなくて！　ありがとうございます！　これで彼とは心理的にも別離できます！」

「いいさ。俺もすごい話を聞けて嬉しい」

「そうですか。ははっ」

明るく笑う姿を見て本当にすつきりしたのだろつ。女は立ち上がった。

「さて！　じゃ！　私行きますね」

「ああ。ありがとう。足元気をつけてな」

「はい！　…あの、キスしていいですか？」

衝動的に言ってしまったのだろつ。彼女の顔が赤くなった。

「へえ？」

「冗談ですよ！　冗談！　じゃ！」

手を振ると女は行ってしまった。

ドウジはそんな女の後姿を見ながらある事を思い出していた。ノートにさっそく書き始める。

『【濡女】…という妖怪を聞いたことがあるだろうか？　【百怪図巻】によれば、上半身は女。だが、下半身は幽霊、もしくは蛇と言われている妖怪だ。髪は常に濡れており、絶世の美女だという。主に獵師を襲い、人を食っていた。手に持つ赤ん坊は重い石となり、人を動けなくしたと言われている。今回の彼女の話はその妖怪にどこか似ている』

筆が止まる。そしてしばらくしてまた書き始める。

『もし仮に…彼女の元彼が【濡女】に憑かれているとしたら…どうしてその妖怪は元彼を殺さないのか？ 文献でも人を襲い、食うということは書かれているが、人を助けたという例は見当たらない。そこにもしかしたら重要な意味があるのかもしれない。彼女はレーシック手術を受けてソレが見るようになったと言った。彼が同窓会に出席し、他の人にも見られているのならやはり彼女と彼にしか【濡女】は見えていないと言える』

(うん？ …そういえば…)

『そういえばおかしな事が1点ある。彼女の話の最後に、元彼は彼女が【濡女】を見えていることを知っていた。元彼は彼女がレーシック手術を受けたことは”知らない”はずだ。知っていたとしても、たかがレーシック手術で妖怪が見えていると判断できるだろうか？ それでは何故彼は彼女は【濡女】が見えると”断定的”に言ったのだろうか？』

(……………)

『その答えは…これは推測だが…もしかするとその【濡女】は誰かにソックリだったのではないか？ 元彼がよく知っていて、自分が付き合ってきた彼女の中で唯一生きている人間と言え…』

ドウジがもう一度去っていく彼女を見た。

彼女はもう遠くにいたが、その後姿をはっきりと見る事ができた。
彼女の足元が―ボヤツと透けて見えなくなっていた。

ふと―何か緑色のものが足に絡まっていることに気づいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7942m/>

空白の話 ～レイシク～

2010年11月6日01時25分発行